

熊本駅周辺整備におけるワーキングシステムのあり方に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○山本良太
熊本大学工学部 正会員 小林一郎

熊本大学工学部 正会員 星野裕司
熊本大学大学院 学生会員 増山晃太

1. 背景・目的

現在、熊本駅では平成23年の新幹線開業、平成28年の在来線高架化完了に伴い駅周辺整備がすすめられている。すべての整備が完了するのは平成30年頃と長期にわたり、整備区域は約63haと広域である。県と市は、デザインの統一性や長期にわたるデザインの一貫性を図りながら、まちづくりをすすめるデザイン調整システムとして、「熊本駅周辺地域都市空間デザイン会議」（以下、デザイン会議）を設置している。

このような都市デザインの調整の仕組みとしては、ツリー状の組織であるマスターアーキテクト方式がしばしば見られる。これに対し、デザイン会議は、トップを置かないフラットな関係で協議や議論を行っている。また、設計の実働部隊で組織する都市空間デザインワーキングシステム（以下、WG）を設けている。このWGは、継続性を考慮し、若手・地元を意識したメンバーで構成している。このように、フラットな議論の場で実務関係者の合意により都市デザイン調整を行う仕組みは、これまでにない試みであり着目すべき対象だと考える。本研究では、このような場における議論の進め方を整理しておくことは重要であると考え、熊本駅周辺整備におけるWGのあり方について考察を行うことを目的とする。

2. 研究方法

平成17年9月6日第1回WG～平成19年12月26日第45回WGまでの議事調査とWGメンバーへのヒアリング調査を実施し（表-1）、時系列に事業経緯を整理する。これらの結果を基に、デザイン調整におけるWGの動きを考察し、熊本駅周辺整備におけるWGの“有効性”と“課題”を抽出する。

3. 熊本駅周辺整備のデザイン調整について

3. 1 熊本駅周辺整備のデザイン調整の仕組み

デザイン会議という都市デザイン調整システムは、以下の3つで構成されている。1つ目は、空間構成上重要な公共空間、街並み形成上重要な施設との調整を行う「都市空間デザイン会議（本会議）」（以下、本会議）である。2つ目は、本会議で対象とならない公共空間や大規模建築物等との調整を行うWGである。3つ目は、戸建住宅や生活道路など上記に該当しない施設との調整に活用する「都市空間デザインガイド」（以下、デザインガイド）である（図-1）。

表-1 ヒアリング調査の対象者

名前	役職
松永信弘氏	県庁 土木技術管理室課長補佐
村田要氏	熊本駅周辺整備事務所 計画課 主任技師
田中智之氏	熊本大学 准教授
星野裕司氏	熊本大学 准教授
荒川雅俊氏	(株)水野建設コンサルタント 設計部

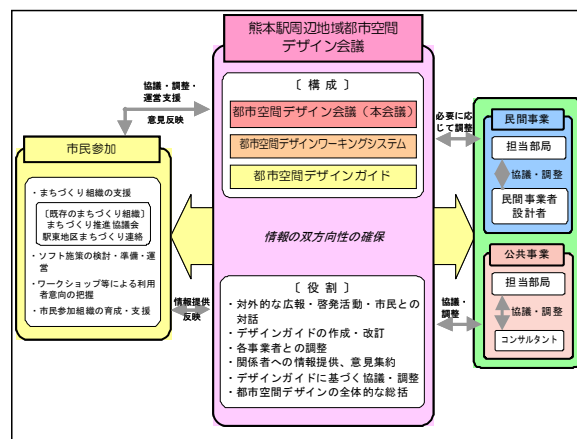


図-1 デザイン調整の体制とデザイン会議の役割¹⁾

3. 2 デザイン調整におけるWGの動き

ヒアリング調査を基に、議事と合わせて整理すると回答が集中しているところがあった。このことから、以下に示すように5つの事項に整理することができた。

（１）WG の形成

WG を構成している 3 名の学識経験者は、それぞれ土木・建築・ID を専門とする地元の 30 代若手メンバーである。また、関係コンサルタントについても若手が起用されており、地元も入っている。これに関して、松永氏は「WG の設立趣旨といったときに、一番大事なのは、継続性で、若手・地元をいれようと思った。また、異分野・異業種の人たちを一同に会して議論をする場を作ろうと思った。」と述べている（図-2）。

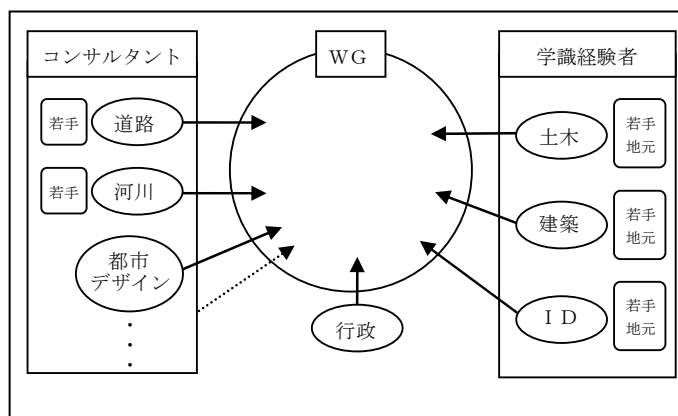


図-2 WG の構成メンバー

（２）公共空間のデザイン調整

WG は、(1) で記述したように、異分野・異業者の人たちが一同に会する場であり、「学識経験者・コンサルタント・行政の壁を取り払い、いろいろな視点からいろいろな意見が出てくるのは良い。相乗効果にもなる。」と村田氏、荒川氏は述べている。一方で、「決定権が不明確なため、議論が進まない。」とも述べている。以上より、WG はフラットな関係で議論を進めている点が特徴であるが、良い面と悪い面を持ち合わせていることがいえる。

（３）デザインガイド策定

熊本駅周辺事務所は、平成 19 年 6 月にデザインガイド本編を策定している。これは、WG での議論によって作成されている。これに関して、「デザインガイドに関して議論することで、WG 内の意思統一が図れた。」と村田氏は述べており、同様な事を星野氏、荒川氏も述べている。つまり、デザインガイドをまとめる過程において、WG メンバーの都市空間の考え方や意思が共有できていったといえる。

（４）民間事業者とのデザイン調整

WG において、東 A 地区再開発事業の事業者との

デザイン調整は、WG と再開発側双方の考え方を提示し、進められている。WG といった既存の組織に、後から入ってくる場合、対立構造が生まれやすいが、「一生懸命調整しようと思ってくれている。」と村田氏は述べている。議事を見ても、徐々にお互いの意見を考慮し、調整していることが伺える。以上より、民間事業者との調整においても、WG で議論を重ねることにより、考え方・コンセプトの統一が図りやすいといえる（図-3）。

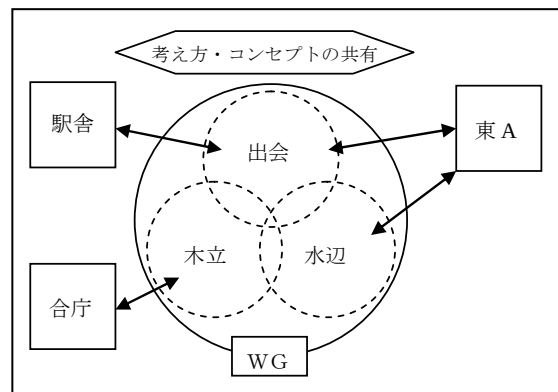


図-3 民間事業者とのデザイン調整

（５）WG の今後について

(1) で記述したように、WG は継続性を第一に考えられているため、松永氏は「設計が終わった後も、施工・管理、管理・運営、リニューアルまでやりたい。」と述べている。また、「市民が入ってきて、まちづくりの相談の場などになってほしい。」という考えをヒアリング対象者全員から聞くことができた。これより、WG の今後に関する議論が必要であると考ええる。

4. おわりに

本稿では5つの事項においてWGの動きを整理し、有効性と課題を示した。

今後は、ヒアリング調査をWGメンバーだけではなく、本会議のメンバーにも実施する予定である。また、他のデザイン調整の仕組みの調査を行い、比較を行っていきたい。

《参考文献》

- 1) 熊本県・熊本市：熊本駅周辺地域都市空間デザインガイドー本編一、2007. 6